日本行動計量学会
計量学会報
第48号
1989年9月30日
日本行動計量学会
運営委員会広報係
（〒106）東京都港区
南麻布4－6－7
統計数理研究所内

〈巻頭言〉

法律学と計量行動学

松村良之

法律学は一見したところ行動計量学とは最も無縁の学問であるように見える。実際、法律学はローマ以来二千年にわたって基本的には教義学であった。しかしこのような教義学的な法律学に対して科学的な法律学を主張する立場が歴史上何回か現れた。そのような科学的法律学を主張する立場の中で、「計量」と最も関連が深いと思われるのは一九五〇年代の後半以降コンピュータの発達と平行して盛んとなったいわゆるジュリメトリクス（日本語では文字通り計量法律学と訳される）であろう。そこで有力な研究の一つは、人間の意思決定の過程を計量的にとらえるというアイディアに基礎をおく司法行動研究と言われる分野である。そしてその典型例は、多変量解析を学んだ人なら誰でも思いつきそうな、過去のたくさんの判決から将来の判決を予測しようといういわゆる判決予測研究である。データは過去の判決という入手し得る文書の形で存在しており、それをもとに刑期、有罪か無罪か、損害賠償額等を予測する。それはまさに多変量解析の教科書的なケースである。実際初期にはプリミティブな手法でその研究がなされていたが、その後多変量解析の教科書にあるような様々な手法が用いられるようになった。

しかしこの研究は七〇年代には急速に衰退する。アメリカにおける衰退の直接的な理由は予測が必ずしも当たらなかったということであり、それは判例法の世界に固有の事情（先例の拘束からもっともらしい理由づけによっていかに免れるかが、先例拘束性の原理のポイントである）があるが、基本的には単なる判決の予測では実務的な必要はともかく、理論的インプリケーションがないためであった。実際、法的推論の性質を研究しようとする研究者にとって、判決予測研究はあまり意味がない。そして今のべた事情は単に法律の世界だけでなく、技法的には洗練された行動計量学的なアプローチの陥りやすい陥穽を示しているように思われる。

ジュリメトリクスが死滅した後に、法的意思決定過程、推論過程を多変量解析を用いるわけではないが同じくコンピュータの手助けにより明らかにしようとしているのがいわゆる「AIと法」というアプローチである。それは、計算から推論へというコンピュータの利用の一般的趨勢にも対応している。そして、多くのAI研究者は法の領域を格好のAI研究のドメインと考えている。しかし、このようなアプローチは法の解釈適用の要諦は論理ではない（それに替わるものとして経験とか勘があげられるがそれがはっきりしないのがまさに問題である）という二〇世紀になってようやく到達した知見を再びロジックを重視した一九世紀の法学に引き戻す危険もはらんでいるように思われる。

つまり法学の世界は意思決定の過程を二千年にわたって問題にしてきた。それ故、意思決定の過程をなんらかの方法で研究しようとする人々（行動計量学的アプローチもその有力な一つである）にとっては魅力的な領域であるが、また多くの落し穴も待っているのである。

まつむら・よしゆき
日本行動計量学会理事
北海道大学法学部教授

第十七回大会報告

実行委員長　脇本和昌

第十七回日本行動計量学会大会は、八月三日から五日の三日間、岡山市のカルチャーホテルで開催されました。

「台風一過の夏晴れ」？のせいか、岡山独特の蒸し暑い三日間ではありましたが、会場が駅から近く、全館冷房完備という恵まれた環境にあったため、その効果が十二分に発揮でき、学会運営もスムーズにでき、参加者の皆様にも満足していただいたのではないかと思っております。

今回の大会では、二つの特別講演を企画し、その一つは、淵一博氏（新世代コンピュータ技術開発機構研究所）に依頼し、『第五世代コンピュータプロジェクト』（司会：垂水）という演題で、講演していただきました。他の一つは、原田黄實穂氏（岡山経済研究所）、田中潔氏（岡山商科大学）の両氏に依頼し、『瀬戸大橋架橋に伴う商圏、行動圏の変化』（司会：脇本）という演題で講演していただきました。両講演とも、多数の熱心な参会者を集め、とても熱のこもったすばらしい講演になりました。

また、パネルディスカッションとして、このところ非常に注目を浴び、同時に多くの議論の対象となっている分野についての、『ファジィ理論の現状と展望』（企画と司会：有田）を設け、パネラーに、山川烈氏（九州工業大学）、戸貝方規氏（トガイインフラロジック社）、向殿政男（明治大学）、斉藤泰一氏（川崎医科大学）の四氏をお迎えして、活発なディスカッションを行なっていただきました。

一方、個人の研究発表は、特別セッションとして、①感度分析・モデル診断（企画：田中）、②教育測定・評価のシステムズアプローチ（企画：竹谷）、③感覚と計量（企画：馬場）、④動物に関する行動計量（企画：渡辺）、⑤データの視覚表現の諸方と実際（企画：後藤）、⑥大学入試（企画：岩坪）、の六セッションが開催されました。これらの発表の中には、後日、新聞紙上で取り上げられたものもあり、世間の関心の深さがうかがえます。

また、一般セッションとして、①尺度構成法・数量化、②数学・統計学、③心理、④多変量、⑤社会・エキスパート・計算機、⑥医学、の六セッションが開催され、特別セッションとあわせて六十四件の発表が行われました。

総会は八月四日の第二日に行われ、通常業務関連報告と同時に、学会功績賞と優秀賞がそれぞれ、次の方に与えられました。前者は、後藤昌司（塩野義解析センター）に、また後者は、竹谷誠（拓殖大学）に対してでした。両氏の今後一層の御活躍をお祈り申し上げます。

同日夕刻からは、懇親会が六十余名の参加を得て、岡山駅近くの「557」でバーベキューを食べながら、楽しい雰囲気で和やかに行われました。

また、最終日にエクスカーションとして、「瀬戸大橋ツアー」を設け、昨年開通した瀬戸大橋を渡って、瀬戸大橋展望の島として知られる与島まで、ご案内させていただきました。

今回の大会への参加者数は、正会員百四十二名、準会員八名、非会員十五名、の計百六十五名でした。

本大会の事務局として企画と実行の総指揮をとったのは、垂水共之氏であり、その補佐をしたのは、林篤裕氏をはじめとする大会実行委員の方々、および岡山大学の学生諸君であります。

最後になりましたが、本大会を、このように盛況に行なうことができましたのも、ひとえに、肥田野直理事長、江川清事務局長、をはじめとする会員の皆様のあたたかいご支援のおかげだと心より厚く御礼申し上げます。

【実行委員会】（学会事務局注）

委員長・脇本和昌（岡山大）

委員　・田中豊（岡山大）・栗原考次（同）・尾高好政（岡山理大）・垂水共之（岡山大）・平井安久（同）・福森護（岡山中国短大）・有田清三郎（川崎医大）・梶谷文彦（同）・山本英二（岡山理大）・一村稔（同）・林篤裕（川崎医大）・佐井至道（岡山商大）

会議記録

○理事会
時・平成元年四月十日
所・統計数理研究所
出席者・理事十一名
1. 各種委員会報告があった。
2. 脇本理事から、第十七回大会の準備状況の報告があった。
3. その他、他学会からの共催申し入れ状況の報告と検討が行われた。

○理事会
時・平成元年六月二十六日
所・統計数理研究所
出席者・理事九名
1. 担当理事より、昭和六十三年度決算報告および平成元年度予算案が提出され、それぞれ承認された。
2. 第十七回大会での総会次第について意見を交換した。
3. 学会賞授賞者を決定した。
4. 第十八回大会の開催校について意見交換がなされ、東京女子大学に依頼することとした。
5. 各種委員会報告、事務局報告が行われた。

○理事会
時・平成元年八月三日
所・岡山カルチャーホテル
出席者・理事十二名
1. 第十七回大会の総会次第を決定した。
2. 各種委員会報告が行われた。
3. 第十八回大会を東京女子大学で開催することが決定した（開催時期は平成二年九月中旬予定）。
4. 第五期学会賞選考委員会の委員長を決定した。
5. その他、岩坪理事から、日本学術会議・行動科学研連主催のシンポジウムが十月二十七日に開催される旨の報告があった（詳細は8頁参照）。

○第十七回大会総会
時・平成元年八月四日
所・岡山カルチャーホテル
（開会の辞）学会事務局（江川理事）
（挨拶）開催校（脇本教授）
学会（肥田野理事長）
（議長選出）田中豊（岡山大学教養部教授）を選出
（報告および議事）
1. 昭和六十三年度事業報告、同決算報告（肥田野理事長および担当理事より行われ、原案通り承認された。）
2. 会計監査報告（宮原、開原両監事の代理の垂水共之氏より。原案通り承認された。）
3. 平成元年度事業計画、同予算案（肥田野理事長および担当理事より行われ、原案通り承認された。）
（学会賞授与）功績賞が後藤昌司氏に、優秀賞が竹谷誠氏に授与された。
（実行委員長挨拶）（脇本和昌実行委員長）
（閉会の辞）学会事務局（江川理事）

○運営委員会
時・平成元年八月四日
所・岡山カルチャーホテル
出席者・運営委員九名
1. 今後の運営活動について、種々の意見を交換した。また、学会の将来を荷負う若い運営委員が積極的に企画・実行してもらいたいとの、委員長の要望があった。
2. 第五十回記念シンポジウムの企画内容、および「会報」の印刷形式について、意見を交換した。

○運営委員会
時・平成元年九月十四日
所・統計数理研究所
出席者・運営委員六名
1. 懸案の第五十回記念シンポジウムの件について、具体的な企画を進めることとし、広く会員の意向を参照しつつ、プログラムを編成することとした。開催日は、現在検討中であるが、十一月上旬の頃になる見込みである。
2. 村上隆委員より、記念シンポジウム以後に、名古屋で「データ解析」関連のシンポジウムを実施したいとの申し出があり、承認された。開催は十二月上旬を予定する。

学会運営にどうぞご意見を

★右の運営委員会記録にもあるように、月例シンポジウムも五十回を迎え、その記念の企画を検討中です。日本行動計量学会のこれまでを省みつつ、将来にわたっての展望が論じあえるような機会にしたいと、広く会員諸兄のご意見・ご提案をお待ちしています。

★シンポジウムに限らず、学会の活動の各方面についても、いろいろなご意見をお寄せ下さい。

★お近くの運営委員に直接お伝えいただくか、または左の宛先で、事務局（江川）会報係（杉戸）迄。

〒一一五　東京都北区西が丘三丁目九－一四　国立国語研究所

昭和63年度　会計決算

昭和63年4月1日～平成元年3月31日

収入	決算	予算	増減
前年度繰越金	2,688,316円	2,688,316円	0円
63年度学会費	5,849,600	6,840,000	△ 990,400
学会誌売上金	148,250	300,000	△ 151,750
預金利子	46,483	10,000	36,483
学会賞基金からの副賞	150,000	150,000	0
計	8,882,649	9,988,316	△1,105,667

支出	決算	予算	増減
学会誌製作費	1,885,600円	5,605,000円	△3,719,400円
（和文誌　15巻2号）	（1,076,400）	1,076,400	0
（〃　16巻1号）	（0）	950,000	△ 950,000
（〃　16巻2号）	（0）	950,000	△ 950,000
（欧文誌　No.24）	（809,200）	1,314,300	△ 505,100
（〃　No.25）	（0）	1,314,300	△1,314,300
月例会費用	50,000	120,000	△ 70,000
各種委員会活動費	273,000	300,000	△ 27,000
学会事務委託費	1,250,537	1,380,000	△ 129,463
（管理費）	（120,000）	（120,000）	（0）
（発送手数料）	（977,896）	（1,150,000）	（△ 172,104）
（新入会員・異動処理費）	（67,450）	（100,000）	（△ 32,550）
（その他）	（85,191）	（10,000）	（75,191）
人件費	30,000	30,000	0
印刷費	193,024	180,000	13,024
通信費	713,646	1,000,000	△ 286,354
消耗品費	13,240	1,000	12,240
会合費	92,100	80,000	12,100
雑費	15,980	10,000	5,980
予備費	0	1,132,316	△1,132,316
選挙費用	0	0	0
学会賞副賞	150,000	150,000	0
次年度繰越金	4,215,522		4,215,522
計	8,882,649	9,988,316	△1,105,667

平成元年度　予　　算

収　　入	平成元年度予算	昭和63年度実績	備　　考
前年度繰越金	4,215,522円	△2,688,316円	（注１）功績賞及び優秀賞
学術定期刊行物補助金	710,000	0	
平成元年度学会費	6,000,000	5,849,600	
学会誌売上金	300,000	148,250	
預金利子	30,000	46,483	
学会賞基金からの副賞（注１）	150,000	150,000	
計	11,405,522		

支　　出	平成元年度予算	昭和63年度実績	備　　考
学会誌製作費	5,780,000円	1,885,600円	（注２）昭和63年度未発行分
和文誌　16巻1号	980,000（注2）	1,076,400	
〃　16巻2号	980,000（注2）		（注３）編集委員会，運営委員会，刊行物委員会，学術選考委員会，学術会議
〃　17巻1号	980,000		
〃　17巻2号	980,000		
欧文誌　No. 25	930,000（注2）	809,200	
〃　No. 26	930,000		（注４）(財) 日本学会事務センターへの依託費
〃　No. 27	930,000		
月例会費用	120,000	50,000	
各種委員会活動費（注３）	300,000	273,000	（注５）1,200名　年8回発送
学会事務依託費（注４）	1,470,000	1,250,537	
管理費	120,000	120,000	（注６）新入会員　70名
発送手数料	1,150,000（注5）	977,896	異動　250名
新入会員・異動処理費	100,000（注6）	67,450	
その他	100,000（注7）	85,191	（注７）事務連絡費，コピー代，リスト打出し料等
人件費	30,000	30,000	
印刷費（注８）	920,000	193,024	
通信費（注９）	920,000	713,646	（注８）会員名簿印刷費を含む
消耗品費	5,000	13,240	
会合費	110,000	92,100	
雑費	10,000	15,980	（注９）学会事務センターにおける郵税を含む
予備費	1,590,522	0	
選挙費用	0	0	
学会賞副賞	150,000	150,000	
計	11,405,522		

第4回学会賞受賞者の声

功績賞受賞にあたって

後藤昌司（ごとうしょうじ）

このような学会の賞は一般に大学や公立の研究機関で「立派な成果」を提示されるか、あるいは影響力を発揮する活動をされた（学術的色彩の濃い）研究者に授与されるものと思い込んでいたものですから、私方には無関係の事象といつも考えておりました。昨年の受賞者である水野欽司先生のお話では、先生が泥臭い仕事ばかりしていると謙遜されていましたが、私方はさらに、それを地でいく形で「泥にまみれた仕事」を現業（なりわい）としています。そのため、思いもかけず、ご通知をいただいたときには、そういった者が評価されたということで、いくぶんの驚きと照れ臭さを含め、また多分に嬉しいこともあり、複雑な感慨にとらわれました。そして、私自身が評価されたのではなく、私を指導していただいた多くの先生方や私と一緒に歩いてくれた周辺の仲間に光があたったものと思い、ありがたく頂戴することにいたしました。

さて、そのときに思い起こしましたのは、私方が大学院を卒業する折に頂戴した厳しい恩師の「人生には自分で勉強しなくなる危険なときが三度ある」といった言葉でした。その第一の危機は学業を終えて就職するときであり、初めて「給料」を得、他に「甘いこと」が沢山みえることで自己研鑽を忘れることを指しています。第二の危機は結婚するときで、女性を知ること、および女性の「甘さ」に惚れる（家庭の温かさに溺れる）ことで自己研磨を忘れることです。第三の危機は役職に就くか、あるいは「賞」を貰うときを指し、他人に評価されることで「甘さ」になれるか、あるいは厳しさを求めなくなることが危惧されています。最後の台詞が丁度いまの時機にあたるのではないかと感じております。私自身は勉学途上の身であり、これからもいろいろと躓くことが多いかと思います。とくに、統計的データ解析過程の人的側面（態度能力）については今後とも研鑽を積みたいと存じます。今後にかけて多くの先達や仲間の人達のご指導・ご支援をお願いいたします。

最後になりましたが、今回の受賞にあたり、ご指導・ご配慮いただいた先生方、また会員の皆様に心よりお礼を申しあげます。ありがとうございました。

優秀賞受賞にあたって

竹谷誠（たけや・まこと）

このたびは、はからずも学会賞を頂戴し、身に余る光栄に存じます。今回受賞の「教育情報の構造分析法 ― 形成的評価のためのテスト理論」の研究を長年かけて取り組んでこれた環境に対して、素直に感謝する気持ちでいっぱいであります。

まず、学会員の皆様方と学会に厚く御礼申し上げます。と申しますのも、今日こうして栄誉にあずかりましたのは、ひとえに皆様方にご指導ご支援賜ったからであります。境界領域研究の宿命でありましょうが、私の研究も同様で、同じ目的をもった同志は限られており、新しい枠組みを構築していくのは非常に険しい道のりがあります。こうしたときに、本学会は、多変量解析の理論的研究を専門とする方々や様々な領域での実践応用研究をなさる方々が一堂に会するまれな学会であり、自己流の論法を発表しては、心温まるご助言とともに手厳しい議論や質疑を賜りました。本学会、特に学会誌と大会の発表会に育てていただいたといっても過言ではありません。心より御礼申し上げます。

それと同時に、学会の権威に対して、敬意を表したいと思います。ある学会では、学会賞の行方はその学会に属している団体の学会員数や、特定勢力の圧力の関数であったりします。このような意味で賞には無縁の私に対して、御恵贈下さった学会のあり方を崇敬するものであります。ただ、私よりも学会賞に適任の方が多数いらっしゃいますので、その方々には申し訳なく思っております。

今後は、今回の受賞を区切りにまったく新しい分野の研究をしたいと切望しております。しかし、これは願望で終るかもしれませんが……。

最後になりましたが、本学会が益々発展されんことを祈願致します。私も微力を尽くしたいと存じます。

ありがとうございました。

月例シンポジウムを企画して

大学入試センター・石塚　智一
（いしづか・ともいち）

○第49回月例シンポジウム
共分散構造分析とLISREL
時・平成元年三月十七日
所・統計数理研究所

共分散構造分析の考え方は既に二十年程前にその萌芽が見られ、アメリカ・カナダでは十年程前にその代表的プログラム（モデルを指すこともある）LISRELが普及期にあり、我国でもそろそろ普及期に入るかという段階にある。

本シンポジウムはこの期をとらえ、広くは共分散構造分析、狭くはLISRELについて我国の研究者にその姿を正しく認識していただきたいとの希望を込めて企画したものである。会場には、予想をはるかに越えて百名近い参加者があり、この分野における研究者の関心の高さに心強いものを感じた次第である。また斯界の権威と目される先生方の顔も多数見られ、気の弱い企画者の心胆を寒からしめたものだが、幸いにも、発表・討論は厳密なうちにも終始なごやかに進められた。これは、司会を担当下さった池田央先生の穏やかなお人柄によるものが多いと心から感謝している。

シンポジウムでは、石塚が共分散構造分析の考え方の沿革と概要について概説し、一般にはLISRELほど知られていないが、共分散構造分析の重要なモデルの一つと考えられるCOSANについても紹介した。白倉幸男先生からはLISRELモデルの詳細についての解説と、Qプロット法などモデル適合度の判断基準に関する解説があった。また直井優先生からは、その豊富な応用例と応用についての苦労話、留意点などが語られた。

フロアからも活発な発言があり、例えば九州大の浅野長一郎先生からは、LISRELプログラムの収束とパラメータの推定精度について疑問が提示され、その点に秀れているといわれるベントラー&ウィークスのモデルの研究をなさっている旨の発言、あるいは他のフロアの面々からは、LISRELモデルでは許されていないが、一つの指標が外生変数と内生変数のいくつかを同時に代表しているモデルがCOSANでは扱えるか、とか、初期値の設定方法などについての質問があった。また、参加者の多くはプログラムの入手方法に興味を示し、これに対しては、直井、白倉両先生から親切な回答があった。以上のように、フロアからの発言にも、企画者として啓発されるものが多く、みのりあるシンポジウムだったと思う。

私見では、一般に工学系の会員の多くは構成概念とか潜在変数とかにあまり興味を示されないようだが、心理学・社会科学系の研究者にとっては、これらは学問の重要な構成要素となっていると考えている。その意味で、これらの概念をモデルに組み込める共分散構造分析の考え方には、今後、需要が増えてくると予測され、LISRELにしろCOSANにしろ、またベントラー&ウィークスのモデルにしろ、これらのモデルに対する正しい理解が、ますます重要になってくるものと考えている。

今回のシンポジウムの要約は、和文誌『行動計量学』第16巻第2号に掲載される予定なので、当日は参加できなかった会員諸兄のご参考になれば幸甚である。

【予告】
平成2年の第18回大会は、東京女子大学で平成2年9月中旬に開かれることが決まりました。

会員名簿作成のための調査にご協力を！

本学会の会員名簿は昭和五十九年度版の発行以降、経済的事情等により途断え、会員諸氏にご不自由をおかけしてきたことをおわびいたします。

そこで、今年は総会の席上でも申し上げましたように、新版を刊行することとしました。

過日、日本学会事務センターより、会員の皆様宛に、住所・所属等の変更の有無を問い合わせる葉書をお送りしました。

会員名簿にはできる限り正確な情報を記載したいと考えておりますので、何とぞご協力下さいますようお願い申し上げます。

なお、身近な会員の中で、調査葉書が届いていない方がありましたら、左記宛にご連絡下さい。

▼学会事務センター　坂口正行氏
電話（〇三）八一七―五八〇一

関連する研究集会の情報

○日本学術会議・行動科学研究連絡委員会主催シンポジウム「行動科学を考える」

時・平成元年十月二十七日（金）
十三時から十七時まで
所・日本学術会議・第一部会議室
（港区六本木七丁目22－34、
地下鉄千代田線乃木坂駅）
司会　上里一郎（広島大）
発題
身体と行動　末松弘行（東大）
心と行動　国分康孝（筑波大）
社会と行動　三隅二不二（奈大）
指定討論者　春木豊（早稲田大）

○組織デザインとマネジメントに関する人間工学国際シンポジウム

（第三回。略称ODAM－90）
時・平成二年七月十八日から
二十一日まで（四日間）
所・国立京都国際会館、および
京都工芸繊維大学
主催・日本人間工学会、国際人間工学会及び各ODAM委員会
協賛・日本行動計量学会他、多数
主要テーマ
組織デザイン、マクロ人間工学、組織システム、参加人間工学、FAとロボット応用、訓練システム、文化と文化交差要因、高齢化、人体計測、技術移転、オフィスとソフト管理、その他。
研究発表アブストラクト（英文）
題目、要旨（三〇〇語以内）、
氏名、肩書、職業、連絡先住所、
電話、ファクス。A4一枚に。
締切　平成元年十二月一日
連絡先・〒612京都市伏見区深草塚本町67　龍谷大学経営学部
和多田（わただ）淳三氏あて
Fax　〇七五―六四二―八三一一

会員数（元・九・十六現在）
名誉会員　一名
正会員　一、〇一六名
準会員　七三名
賛助会員　二七社

昭和63年度　学会賞基金決算報告

昭和63. 4. 1～平成1. 3. 31.

収　入	決　算	予　算	増　減
前年度繰越金	1,182,219円	1,182,219円	0円
林知己夫氏よりの寄付金	100,000	100,000	0
預金利子	50,363	20,000	30,363
計	1,332,582	1,302,219	30,363

支　出	決　算	予　算	増　減
学会賞副賞	150,000円	150,000円	0円
次年度への繰越金	1,182,582	1,152,219	30,363
計	1,332,582	1,302,219	30,363

【会報係より】

★『会報』も近く第50号を迎えます。これを機会に、紙面の構成や体裁、記事内容を検討して、新しい『会報』をお届けするようにしていきたいと考えています。

★『会報』の模様がえについて、会員各位のご意見・ご提案をお待ちしています。記事内容、企画はもちろんのこと、紙面の構成、印刷、体裁など、どんな方面についてでもありがたく拝聴します。

★『会報』のタイトル・デザインも、できれば新らたなものに模様がえしたいと思います。残念ながら、デザイン料は負担できませんので、会員各位のボランティア精神に期待したく、これも色々なアイディアをお待ちします。採否は係にご一任願えればと存じます。

★模様がえをするといっても、内容を充実させるために会員各位からの投稿や情報をお待ちする姿勢に変わりはありません。とくに、若い会員諸兄からの「会員の声」を待望します。

★ご意見、ご投稿のあて先は、〒一一五東京都北区西が丘三丁目九番十四号　国立国語研究所内
杉戸清樹（03－九〇〇－三一一一）